

中国空軍が東シナ海防空識別圏における防空対処能力を強化

漢和防務評論 20150202 (抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

最近の中国戦闘機による日本偵察機に対する迎撃活動は、中央軍事委員会の聯合作戦指揮センターの指示のもと、総参謀部作戦部を通じ東シナ海聯合作戦指揮センターが管制し指揮して行ったものと漢和防務評論は分析しています。

迎撃した戦闘機は上海崇明島飛行場に元々配備されている第2世代のJ-8D防空戦闘機ではなく、機番号から航空兵第33師団所属のSU-27であり、中国空軍の早期警戒機KJ-200/2000が管制、指揮したと分析しています。このことから中国空軍は、米軍機、自衛隊機に対しては、新型機と精鋭なパイロットを選んで指向していることが分かります。かつては機動運用に不慣れな中国空軍でしたが小規模とはいえ、西側並みに機動運用を行えるようになったようです。

KDR ニュース香港特電：

中国は、2013年に東シナ海に防空識別圏を設定したのち、直ちに東シナ海聯合作戦指揮センターを設立した。2014年以降、上海にKJ-200、KJ-2000及びスホーイシリーズの戦闘機が頻繁に出現しているのをKDRは探知している。上海の崇明島飛行場は航空兵第26師団の基地でありJ-8Dが配備されていた。2014年以降、上海の防空態勢は明らかに強化されている。

最近、東シナ海で日本の偵察機に対し迎撃したSU-27は、この飛行場に一時的に配備されたKJ-200/2000早期警戒機の指揮を受けたとKDRは判断している。しかし航空兵第26師団がJ-11或いはSU-27に機種更新された形跡はない。この点は、不思議に感じている。上海は、中国第2の大都市として長年J-8Dが防空任務に就いていた。通常、第3世代戦闘機に換装された基地は、強化され、新たな飛行格納庫が建設される。しかし崇明島飛行場にはこれが建設されていない。したがってKDRは「日本の偵察機を迎撃したJ-11/SU-27シリーズ戦闘機は一時的に配備されたものであり、最近成立したばかりの東シナ海聯合作戦指揮センターが早期警戒機を通じて指揮した」とものと判断している。これらのSU-27SK/UBKが航空兵第33師団に所属するものかどうか不明であるが、分析する価値はある。なぜならば、2014年6月以降、日本の偵察機を2度迎撃した機番号の戦闘機は航空兵第33師団の所属機であるからだ。

これらの状況を総合的に判断した結果は以下の通りである。現在、東シナ海防空識別圏を管制し指揮するのは：最上層部は、中央軍事委員会聯合作戦指揮センターの隷下にある総参謀部作戦部及び空軍司令部である。中層部は、東シナ海聯合作戦指揮センター及び中国空軍上海指揮所である。最下層は、管轄範囲の空軍戦闘機師団及び偵察機師団並びに旅団である。

今回の日本の偵察機に対する迎撃活動の間、迎撃空域付近には中国空軍の早期警戒機が存在していたはずである。

以上